

社会人基礎力と社会人基盤力

—12の能力要素と社会人基盤力—

佐々木 武 夫

1：問題の所在

経済産業省が提案した「社会人基礎力」の用語は、周知のように「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の<3つの力>と、それらを構成する主体性、働きかけ力、実行力、課題発見力、計画力、創造力、発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性、ストレスコントロール力などの<12の能力要素>から構成される概念で、その普及により、変化する世界経済の中で日本経済が必要とする人材育成の強化を図ろうとするものであった。経済産業省による「社会人基礎力」は、ほぼ同時期に提案された文部科学省による「キャリア教育と職業教育」、厚生労働省の「YESプログラム」の「就職基礎能力」などとともに、政府が2006年から着手した「若者の自立・挑戦のためのアクションプラン(改定)」の理論的な背景となったものである。

本稿では、この「社会人基礎力」とその「周辺能力」に注目する。学校から社会への移行に直面する社会科学系大学生が、どのようにして「職場や地域社会の中で多様な人々と共に仕事」をするために必要な基礎知識や生活習慣を獲得しようとしているのかを考察する。そして、そのためにはどのような方策を取り得るのかを検討したい¹⁾。

ところで経済産業省の「社会人基礎力」の概念を、その用語の印象から考えると、「社会人」と「基礎力」ということになる。個人が「社会人(職業人)」になるのは18歳くらいから20歳くらいの年齢帯であり、エリ

クソンの人生の発達課題でいえば「青年期」から「成人前期」にあたりアイデンティティを形成し、配偶者を選択する年齢であり、学校教育の段階でいえば「幼稚・保育園」「小学校」「中等学校」「高等学校」の後期中等教育卒業時頃から高等教育卒業時期頃にかけての年齢ということになる²⁾。この時点での「基礎力」ということになる。ところで、「社会人基礎力」フレームワークの優れた点は、「チームで働く力」の育成に最も力点が置かれているものの、それだけには留まらず「社会人基礎力」とその「周辺能力」との関連にも必要な配慮と目配りがなされていた点にあった。2006年「社会人基礎力に関する研究会—中間取りまとめ—」の段階で、＜社会人基礎力の位置づけ＞は、「家庭・地域社会から小・中・高・大学や各種学校・大学院という学校教育を経て就職活動・採用活動と進み、就職後の段階さらにはその後の転職段階」までが幅広く位置づけられたフレームをもっていた。ついで＜職場や地域社会で活躍する上で必要となる能力について＞では「基礎学力」と「専門知識」を生かす力としての「社会人基礎力」さらにその基盤となっている「人間性、基本的な生活習慣」という「能力の全体像」、「学力と社会人基礎力の相関関係の変化」、企業と学生の「意識ギャップ」への注目など、学生・学校・企業・地域社会(行政)・グローバル化の動向など広い視点から分析のフレームワークが設定されていた。

ただ、この分析フレームの広さのメリットは必ずしもその後は十分に展開し、生かされていったとは言にくいのではないか。この論文では、この点に注目して「職場や地域社会で活躍する上で必要となる能力」の能力の全体像の分析フレームに関する「社会人基礎力」と「社会人基盤(キバン)力」(「人間性、基本的な生活習慣」、「基礎学力」)及び「専門知識・インターンシップ」という3領域を区別し、図1にあるような「社会人基礎力と社会人基盤(キバン)力」のフレームで学校から職業への移行を幅広い視野から検討してみることにしたい。「社会人基盤力」への注目は、「社会人基礎力」の12の能力要素を有効に養成していくためには、まず、その基盤となる「基礎知識」や「人間性、基本的な生活習慣」との関連を認

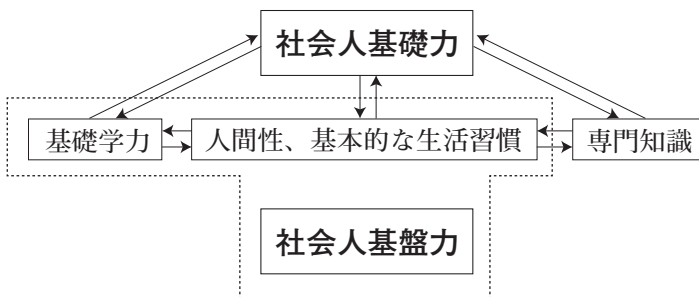
識しつつレベルアップを図っていく必要があるのではないか。

この「社会人基盤（キバン）力」は、読み書き、計算、基本ITスキル等の「基礎学力」、と「思いやり、公共心、倫理観、基礎的なマナー、身の周りのことを自分でしっかりとやる等」の「人間性、基本的な生活習慣」の2領域から構成されている。「社会人基礎力」と「社会人基盤力」との関連について言及された部分を、少し長いが、『社会人基礎力 育成の手引き』2010から引用すると次のようである³⁾。

社会で働くためには、読み書き・計算・ITスキルなどの「基礎学力」や、仕事に必要な知識・技能などの「専門知識」が必要です。さらに、一個の人間として社会生活を送るための責任感や思いやり、公共心、倫理観、基本的なマナー、一般常識・教養などの「人間性・基本的な生活習慣」は全ての活動の基盤となります。「社会人基礎力」は、これらの他の要素（ここでいう「社会人基盤力」）と重なり合う部分を持ち、さまざまな経験を通して相互に作用しながら、共に成長していくものです。例えば、「専門知識」を身に付けることによって、仕事に「主体性」を持って取り組むことができるようになり、その結果、より高い活躍ができるようになる、と言えます。つまり、能力としての「社会人基礎力」は、それだけを単独に高めるというのではなく、よい経験や活動をすることによって循環的に向上するものと考えらると指摘されている。

以上の検討で言及してきた「社会人基礎力」と「社会人基盤力」の関連を図示したものが、図1の「社会人基礎力と社会人基盤力」である⁴⁾。この図1が本稿の分析視点である。

図1 「社会人基礎力」と「社会人基盤力」



ところで、20世紀後半、物づくりの技術に支えられてきた日本の家電製品は、国内市場が飽和していくと同時に、輸出ではデジタル化の波に洗われ、家電製品、半導体や液晶などは、しだいに、世界市場での優位性を失いつつあった。家電の業界は、国内では精密輸送機械やIT産業への転換が進められ、国内の労働市場でも、求人動向はものづくりから金融業や各種サービス産業へという転換が進んだ。この動向の中で、韓国や台湾の技術力が向上するとともに、中国はしだいに、世界の工場としての実力を獲得していき、さらには世界の市場へと成長していった。日本企業はその生産の拠点を海外に移動させる動向が生まれ、グローバル化の波に洗われることになった。周知のように、バブル景気後、長期間のバブル不況に直面し、日本では21世紀に入っても不況は持続し、学校から職場への移行の困難さが注目されるようになった。とりわけ、高卒者の学校から職場への移行の困難が注目された⁵⁾。大学卒も同様で、2000年代の前半の「失われた10年」などと呼ばれた不況の中、就職浪人やフリーターやニートの増大が指摘された。

本稿の目的は、アンケート調査のデータに基づいて「社会人基礎力」の12の能力要素と「社会人基盤力」（「基礎学力」と「人間性、基本的な生活習慣」）の7問との関連を、記述統計の χ^2 検定を利用して検討することにある。とくに、「チームで働く力」と「社会人基盤力」との関連に注目したい。「チームで働く力」は、「傾聴力」「柔軟性」「状況把握力」の「人間性、基本的な生活習慣」の項目と関連がみられた。「前に踏み出す力」も「人間性、基本的な生活習慣」との関連を見ることができた。前期青年期においては、「人間性、基本的な生活習慣」は意外に重要なコンピテンシーの一つではないか。この点は現実の経験からしても、就活において重視されてきた側面であろう。

また、3つの能力要素のうち「考えぬく力」は、大学における「専門知識」の獲得の過程で訓練されることが望ましいので、学校から社会への移行に直面する社会科学系大学生が、どのようにして「職場や地域社会の中で多様な人々と共に仕事をしていくために」必要な知識を獲得するのを支

援するののかの方策の考察が望まれる。この論文ではこの点は十分には検討できなかった。項目のみ「専門知識」「インターンシップ」として第5節で簡単に言及した。

全体として「社会人基礎力」の「前に踏み出す力」と「チームで働く力」の2つの力は、この論文で定義した「社会人基盤力」の中の「人間性、基本的な生活習慣」と意外に強い関連性が存在するのではないかという点を詳しく考察したい。また、「専門知識・インターンシップ」の「専門知識」はどのような「基礎学力」と関連がみられるのだろうか。「インターンシップ」への関心や経験では、「チームで働く力」との関連に注目したい。以上の点を検討していくことにしたい。社会人基礎力は、この論文で指摘するように、社会人基盤（キバン）力と、「専門知識」との組み合わせとして、考えることができるのではないか。

2：先行研究

大学の教育に「社会人基礎力」の概念を取り入れているのが、2008年中央教育審議会の「学士力」の概念である。「学士力」の概念は、21世紀型市民に必要なものとして、「知識・理解」、「汎用的技能」「態度・志向性」、「統合的な学習経験と創造的思考力」の4項目を指摘する。1番目の「知識・理解」は、「専攻する特定の学問分野における基本的な知識を体系的に理解するとともに、その知識体系の意味と自己の存在を歴史・社会・自然と関連づけて理解する」とし、(1)多文化・異文化に関する知識の理解。(2)人類の文化、社会と自然に関する知識の理解を指摘している。次いで2番目の「汎用的技能」とし5つの技能が指摘されている。(1)コミュニケーション・スキル、(2)数量的スキル、(3)情報リテラシー、(4)論理的思考力、(5)問題解決力の各々である。3番目の「態度・志向性」として以下の5つの力が指摘されている。(1)自己管理力、(2)チームワーク、リーダーシップ、(3)倫理観、(4)市民としての社会的責任、(5)生涯学習能力の各々

である。最後に、4番目の「統合的な学習経験と創造的思考力」として、これまでに獲得した知識・技能・態度等を総合的に活用し、自らが立てた新たな課題にそれらを適用し、その課題を解決する能力を培うことが求められている⁶⁾。

この「学士力」の概念は、経済産業省の「社会人基礎力」で指摘されていたが、それほど注目されてこなかった「能力の全体像」の中の「基礎学力」と「人間性・基本的な生活習慣」と、12の能力要素やコミュニケーションスキルなどのコンピテンシーとの関連に注目したものである。本稿では、中央教育審議会の「学士力」と同様の広い視野で、「社会人基礎力」の12の能力分野のフレームワークの有効性を再検討することにした。「問題の所在」で指摘したように、社会人基礎力における「能力の全体像」の「人間性・基本的な生活習慣と基礎学力」の部分で「社会人基盤（キバン）力」という名称を呼び、「社会人基礎力」の各々の能力要素と、この「社会人基盤力」の各項目との関連を検討することを本稿の目的に設定したい。この点が、本研究の目的と、これまでの先行研究との関連である。

図2 「日本の論文をさがす」Ci Nii Articlesにおける「社会人基礎力」の出現頻度

期 間 (出版年)	出現頻度	比率
2005年－2006年	18件	2.4%
2007年－2008年	47件	6.4%
2009年－2010年	112件	15.2%
2011年－2012年	154件	20.7%
2013年－2014年	140件	19.0%
2015年－2016年	163件	22.1%
2017年－2018年（5月末まで）	104件	14.1%
全期間	738件	100.0%

ところで、「社会人基礎力」の概念が提案されてから、現在までの期間で、その研究がどの程度の広がりを持つようになったのかを、「日本の論文をさがすCiNii Articles」の検索ツールを利用して、「社会人基礎力」を論文タイトルのキーワードとするArticle(学会論文、雑誌論文等)の出現頻

度やその論文のタイトル等を分析することで検討しておきたい⁷⁾。以下では、2005年から2018年までの論文の出現頻度とその若干の特徴を検討し、応用研究の動向をみておきたい。

まず、「社会人基礎力」をキーワードとして検索した場合に、年代別の論文ヒット数を示したのが図2である。この作業でみる論文の出現頻度や、論文タイトル、キーワード等の動向から次の4点を指摘できる。

(1)「日本の論文をさがすCiNii Articles」のHPを利用した検索によると、「社会人基礎力」の概念は、2005-2006期間の経済産業省「社会人基礎力に関する研究会 中間とりまとめ」以後注目されるようになったことが確認できる。2005-2006期間にはCiNiiには18本の社会人基礎力をキーワードとする論文が出現している。この期間は、社会人基礎力の概念の『揺籃期』であり、経済産業省の官報やその関連雑誌に「中間とりまとめ」の記事が紹介されているのが特徴である。これ以前には、キャリア教育や職業教育、産学連携など人材形成を研究していた研究者の論文で、「社会人基礎力」が言及されるにすぎなかった⁸⁾。

(2)「社会人基礎力」をキーワードとする論文の出現頻度は、2007-2008年の期間で47件、2009-2010年で112件、2011年-2012年で154件、2013-2014年で140件、2015-2016年で163件、2017-2018年6月までで104件と、増加傾向にあることがわかる。この結果、「社会人基礎力」への社会と研究者の関心は依然として現在でも、持続していることがわかる。

(3)2011-2012年の期間での「社会人基礎力」をキーワードとする論文の研究動向を見てみたい。論文のタイトル及びキーワードに注目すると、まず論文のスタイルは、『揺籃期』の2005-2006年に比較すると、官報や行政に関連する雑誌論文から、大学の紀要論文や学会誌の研究論文において検討されるようになった変化を見ることができる。「社会人基礎力」概念の特徴の一つは、もともと、文系のみならず理系の人材教育やキャリア形成にも強い関心を持っていた。この想定どおりに、しだいに看護系、体育学系、教育工学系、工学系の理系の領域での人材形成の領域で「社会人基礎力」に関心がもたれるようになっていったことがわかる。また、文系でも国際

秘書学系、観光ホスピタリティ学系、教育システム情報学系、ベンチャー学系の新しい研究領域においても関心がもたれるようになってきたことがわかる。

(4)直近の2017-2018年の期間では、まだ約半年を残す時点で、すでに、104件の論文出現頻度がみられる。その論文のタイトルやキーワード等では、アクティブラーニング、デザイン思考、長期インターンシップ、海外体験学習との関連、留学生の就業力、マーケティング、新入生オリエンテーション、課外研究プロジェクト等との関連で「社会人基礎力」が検討されるようになり、この概念の応用の幅が広がっていることがわかる。

本稿では「はじめに」と「先行研究」に続いて、第3節では「アンケート調査と質問票の作成」、第4節では「社会人基礎力と社会人基盤力」(4-1では前に踏み出す力・考え抜く力と社会人基盤力、4-2では、チームで働く力と社会人基盤力)の関連の検討、第5節で「専門知識・インターンシップ」と「社会人基盤力」の関連の検討、第6節「まとめ」の順で考察を進めていきたい。この論文での結論と指摘は、限られたサンプル数と限定された対象を検討したアンケート標本調査であることから、データ分析の過程で指摘できる若干の傾向であることをお断りしておきたい。

また、「社会人基礎力」の測定に関する分析枠組みの再検討の試みとしては、西道実による先行研究がある⁹⁾。西道実氏は3領域12能力要素を検討し、4領域15項目からなる測定尺度の有効性を指摘している。産業経済省の12能力要素に若干の変更を加え、文部科学省の8能力要素からいくつかの能力要素を織り込んだものである。4領域は、操作的定義としてはそれぞれ3項目からなる能力要素から構成されている点は共通している。

3：アンケート調査と質問票の構成

アンケート調査の質問票は、大学から職場へ移行する過程 (From School

to Work) ¹⁰⁾で、大学生が自己の「社会人基礎力」の水準を理解し、「社会人基礎力」を構成する3つの力と12の能力要素を意識すること、次いで、本稿で注目する「社会人基盤（キバン）力」との関連を、学生自身がより深く理解していける一助となることを目的に作成された。

アンケート票の質問項目は28問を準備した。

(1)フェイスシート 4問

1：大学の学年

2：性別

3：大学入試のタイプ

4：インターンシップ

(2)3つの力 3つの能力の自己評価を直接に問うた。3問。

5：3つの力 前に踏み出す力

6：3つの力 考え抜く力

7：3つの力 チームで働く力

8：所属学科

(3)「問題の所在」の図1の「社会人基盤力」=「社会人基礎力」の「基礎学力」と「人間性・基本的な生活習慣」の部分。7問（問9－問15）。7問の問いの内容は、図3参照。各問いはリッカート尺度の「そう思う」から「そう思わない」までの5段階尺度で質問した。

図3 職場や地域で活躍する上で必要となる力

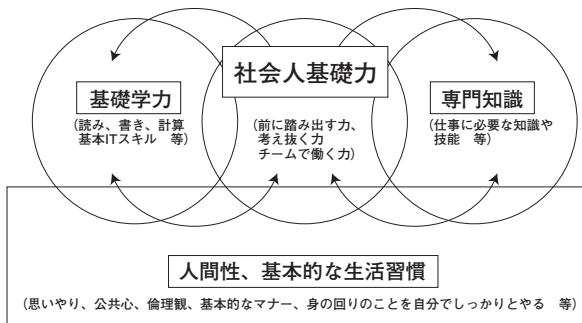


図4 社会人基礎力の構成 —12の能力要素と定義—

3つの力	12の要素	定義	発揮できた例
前に踏み出す力 (アクション)	主体性	物事に進んで取り組む力	自分がやるべきことは何かを見極め、自発的に取り組むことができる 自分の強み・弱みを把握し、困難なことでも自身を持って取り組むことができる 自分なりに判断し、他者に流されず行動できる
	働きかけ力	他人に働きかけ巻き込む力	相手を納得させるために、協力することの必然性（意義、理由、内容など）を伝えることができる 状況に応じて効果的に巻き込むための手段を活用することができる 周囲の人を動かして目標を達成するパワーを持って働きかける
	実行力	目的を設定し確実に行動する力	小さな成長に喜びを感じ、目標達成に向かって粘り強く取り組み続けることができる 失敗を恐れず、とにかくやってみようとする果敢さを持って、取り組むことができる 強い意志を持ち、困難な状況から逃げずに取り組む続けることができる
考え抜く力 (シンキング)	課題発見力	行動を分析し目的や課題を明らかにする力	成果のイメージを明確にして、その実現のために現段階でなすべきことを的確に把握できる 現状を正しく認識するための情報収集や分析ができる 課題を明らかにするために、他者の意見を積極的に求めている
	計画力	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力	作業のプロセスを明らかにして優先順位をつけ、実現性の高い計画を立てられる 常に計画と進捗状況の違いに留意することができる 進捗状況や不満の事体に合わせて、柔軟に計画を修正できる
	創造力	新しい価値を生み出す力	複数のもの（もの、考え方、技術等）を組み合わせ、新しいものを作り出すことができる 従来の常識や発想を転換し、新しいものや解決策を作り出すことができる 成功イメージを常に意識しながら、新しいものを生み出すためのヒントを探している
チームで働く力 (チームワーク)	発信力	自分の意見をわかりやすく伝える力	事例や客観的なデータ等を用いて、具体事になりやすく伝えることができる 聞き手がどのような情報を求めているかを理解して伝えることができる 話そうとすることを自分なりに十分に理解して伝えている
	傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力	内容の確認や質問等を行いながら、相手の意見を正確に理解することができる 相槌や共感等により、相手に話しやすい状況を作ることができる 相手の話を素直に聞くことができる
	柔軟性	意見の違いや立場の違いを理解する力	自分の意見を持ちながら、他人の良い意見も共感を持って受け入れることができる 相手がなぜそのように考えるかを、相手の気持ちになって理解することができる 立場の異なる相手の背景や事情を理解することができる
	状況把握力	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力	周囲から期待されている自分の役割を把握して、行動することができる 自分ができること・他人ができることを的確に判断して行動することができる 周囲の人の状況（人間関係、忙しさ等）に配慮して、良い方向へ向かうよう行動することができる
	規律性	社会のルールや人との約束を守る力	相手に迷惑をかけないよう、最低限守らなければならないルールや約束・マナーを理解している 相手に迷惑をかけたとき、適切な行動を取ることができる 規律や礼儀が特に求められる場面では、相相のないように正しくふるまうことができる
	ストレスコントロール力	ストレスの発生源に対応する力	ストレスの原因を見つけて、自力で、または他人に力を借りても取り除くことができる 他人に相談したり、別のことに取り組んだりする等により、ストレスを一時的に緩和できる ストレスを感じることは一過性、または当然のことと考え、重く受け止めすぎないようにしている

前出『社会人基礎力 育成の手引』、2010、学校法人河合塾より引用。

9：基礎的な計算力

10：日本語の基礎的な読み書き力

11：基本的なビジネスソフト(ワードやパワーポイント等)の操作

12：SNSやスマホの操作

13：先生・先輩や目の上の人に対するマナー

14：思いやりや公共心(ゴミのポイ捨てをしない等)

15：自分の身の周りのことは自分です

16：「専門知識」の学習

(4)「社会人基礎力」の「3つの力と12の能力要素」を問うた。(『社会人基礎力 育成の手引き』での定義を参照にした。図4を参照)

アクション 問17-問19

17：「主体性」自ら率先して、自発的に行動できる力。

18：「働きかけ力」相手を納得させつつ、自分の考えを積極的に伝える力

19：「実行力」決めたことは、必ず確実に実行する力

シンキング 問20-問22

20：「課題発見力」課題に気づいたら、課題の背景を考え、取り組む力

21：「計画力」スケジュールを立て、進捗状況を考え、仕事を進めていく力

22：「創造力」新しいやり方を考え出していく力

チームワーク 問23-問28

23：「発信力」自分の考えを積極的に他人に伝える力。

24：「傾聴力」相手の話をしっかり聞いていることを相手に伝える力

25：「柔軟性」他者の意見を柔軟に受け入れることのできる力

26：「状況把握力」チームがどういう状況にあるのかを把握する力

27：「規律性」基本的な時間厳守と提出物の期限を守り提出する力

28：「ストレスコントロール力」忙しいときでも気持ちの切り替えができる力

前述のように、アンケート質問票の質問文の12の能力要素の質問については経済産業省の「社会人基礎力」の定義に従った。質問の文章もできるだけ、同省が推奨する「学生のレベル別行動事例」を参考に作成した¹¹⁾。ただ、「レベル別行動事例」は、汎用性を重視し作成されているため、やや多義的であった。ここでは社会科学系の学生を対象にしたので、それに合うような表現の文章に工夫した。また、質問文はできるだけ短くし、一つの行動や意見などのコンピテンシーを質問するよう努めた。全体として、数回の予備アンケートを実施し、質問文の改良を試みた。本稿で利用したデータは、2017年5月に実施した商学部の学生を主たる対象にしたデータである。回答者数202人で、有効回答数186であった。アンケートの目的を説明して協力を求め調査を実施した。アンケートの後には、「12の能力要素」「3つの力」の各人の得点を算出してもらい、それまでの調査での平均と自己の得点のズレをチャート図に書いて自己理解を深めてもらった。その図を見つつ、自己の「社会人基礎力」(図4)の特徴を考えてもらうよう設計した。次いで、「社会人基礎力」と「社会人基盤(キバン)力」との関連の理解を促した。

4 「社会人基礎力」と「社会人基盤(キバン)力」

4-1 「前に踏み出す力」・「考え抜く力」と「社会人基盤力」

4-1では、「社会人基礎力」の2つの力である「前に踏み出す力」(アクション)・「考え抜く力」(シンキング)と、「社会人基盤(キバン)力」の7問との関連を、検討したい。前述のように「社会人基盤力」とは、社会人基礎力という「基礎学力」と「人間性・基本的な生活習慣」とをまとめて名称をつけたものである。「社会人基盤力」という用語をつくることで、「社会人基礎力」の12の能力要素を育成し強化していくための基盤について考え、注目してみたいというのがここでの検討課題である。この、

「社会人基礎力」の能力要素と「社会人基盤力」との関連を、データに基づいて、以下の手順で検討を試みてみたい。

(1)、「社会人基礎力」の一つである「前に踏み出す力」の3つの能力要素「主体性」「働きかけ力」「実行力」と、「社会人基盤力」の内の「基礎的な計算力」、「基礎的読み書き力」、「ビジネスソフト（ワードやパワーポイントができる）」、「スマホやSNSを使いこなせる」などの「基礎学力(4問)」との関連を検討した。次いで、「前に踏み出す力」の3つの能力要素と、「公共心」・「基礎的なマナー」・「身の周りのこと自分でできる」などの「人間性・基本的な生活習慣（3問）」との関連を検討したい。計27のクロス表を作成し、基本的な記述統計である χ^2 検定を利用して検討し、有意水準が5%および1%のものを選択して図示したのが図5である¹²⁾。この図表に示されるように「社会人基礎力」と「社会人基盤力」との間には関連性を考えることができる。

(2)同様に、「社会人基礎力」の3つの力の一つである「考え抜く力」の3つの能力要素「課題発見力」「計画力」「創造力」と「社会人基盤力」の「基礎学力（4問）」と「人間性・基本的な生活習慣（3問）」の計7問との関連を検討した。「社会人基礎力」の「考え抜く力」での3問と、「社会人基盤力」での7問の計21のクロス表を作成した。ついでこのクロス表に χ^2 検定を実施し、有意水準が5%および1%のものを、関連が考えられるものとして図6に示した。

(3)でも同様に、「社会人基礎力」の一つである「チームで働く力」の6つの能力要素「発信力」「傾聴力」「柔軟性」「状況把握力」「規律性」「ストレスコントロール力」と「社会人基盤力」の「基礎学力（4問）」と「人間性・基本的な生活習慣（3問）」との関連を検討した。これまでの(1)(2)と同様に、「社会人基礎力」の「考え抜く力」での6問と、「社会人基盤力」での7問の計42のクロス表が検討された。ついでこのクロス表に χ^2 検定を実施し、有意水準が5%および1%のものを、関連が考えられるものとして図7に示した。

「前に踏み出す力」と「社会人基盤力」との関連を要約したのが、表5で

ある。これによると、今回のアンケート調査で、「前に踏み出す力」(アクション)の能力要素「主体性」(物事に進んで取り組む能力要素)とは「社会人基盤力」の「マナーを守る」(有意水準5%)との関連がみられた。つまり、「主体性」は、「人間性・基本的な生活習慣」のなかでは「マナーを守る」(アンケートの質問文ではその一部を質問した「先生や先輩、目の上の人とマナーを守った付き合いができる」)との関連が考えられる。ついで、「社会人基礎力」の能力要素である「働きかけ力」(他人に働きかけ巻き込む力)は、「社会人基盤力」の「基礎読み書き力」(日本語の基礎的な読み書きができるほうだ)、「公共心」(ゴミのポイ捨てはしない等、公共のことにも気をつけることができる)、「身の周りの自立」(生活習慣など自分のみの周りのことは自分でできる)がそれぞれ有意水準5%での関連がみられた。また、「働きかけ力」は「社会人基盤力」の「マナーを守る」と有意水準1%での関連がみられた。この結果、「社会人基礎力」の能力要素としての「働きかけ力」は、「社会人基盤(キバン)力」の半数以上の4つの項目との関連がみられた。最後に、「社会人基礎力」の「実行力」(決めたことは、必ず実行に移す)は、「社会人基盤力」の「マナーを守る」、「身の周りの自立」「専門知識」及び「インターンシップ」(インターンシップに参加したい)と関連がみられた。「実行力」についても、「社会人基盤力」の3つの項目(マナーを守る、公共心、身の周りの自立)で関連がみられた。

図5 「前に踏み出す力」と「社会人基盤力」

「前に踏み出す力」(アクション)

「主体性」: 物事に進んで取り組む力

	Pearson χ^2 値	自由度	期待度数	有意水準
マナーを守る	6.3	2	5 未満 0 セル	5% (<0.05)

「働きかけ力」: 他人に働きかけ巻き込む力

	Pearson χ^2 値	自由度	期待度数	有意水準
基礎的読み書き	12.9	4	5 未満 0 セル	5% (<0.05)
マナーを守る	14.5	4	5 未満 0 セル	1% (<0.01)
公共心	12.0	4	5 未満 1 セル	5% (<0.05)
身の周りの自立	11.5	4	5 未満 0 セル	5% (<0.05)

「実行力」: 目的を設定し確実に行動する力

	Pearson χ^2 値	自由度	期待度数	有意水準
マナーを守る	12.9	4	5 未満 0 セル	1% (<0.01)
公共心	14.5	4	5 未満 1 セル	1% (<0.01)
身の周りの自立	12.0	4	5 未満 0 セル	1% (<0.01)

図6 「考え抜く力」と「社会人基盤力」

「考え抜く力」(シンキング)

「課題発見力」: 現状を分析し目的や課題を明らかにする力

	Pearson χ^2 値	自由度	期待度数	有意水準
SNS・スマホ	6.4	2	5 未満 0 セル	5% (<0.05)
マナーを守る	7.6	2	5 未満 0 セル	5% (<0.05)

「計画力」: 課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力

	Pearson χ^2 値	自由度	期待度数	有意水準
身の周りの自立	15.0	4	5 未満 0 セル	1% (<0.01)

「創造力」: 新しい価値を生み出す力

	Pearson χ^2 値	自由度	期待度数	有意水準
なし				

「考え抜く力」と「社会人基盤力」との関連を要約したのが図6である。これによると、「考え抜く力」(シンキング)の能力要素である「課題発見力」(現状を分析し目的や課題を明らかにする力)と「社会人基盤力」とは次のような関連がみられた。「課題発見力」は、「スマホ・SNS」(スマホやSNSを使いこなせる)、「マナーを守る」の「社会的基盤力」の項目において有意水準5%の関連がみられた。ついで「考え抜く力」の能力要素である「計画力」(課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力)と「社会人基盤力」とは次のような関連がみられた。「計画力」は、「社会人基盤力」の「身の周りの自立」と有意水準1%で関連が見られた。また「考え抜く力」の能力要素である「創造力」(新しい価値を生み出す力)と「社会人基盤力」との関連では、有意水準5%をみたす項目はみられなかった。この「創造力」は、どのような社会的基盤力の変数と関連するのかは、今後検討すべき興味ある課題である。

4-2 「チームで働く力」と「社会人基盤力」

4-2では、「チームで働く力」と「社会人基盤力」との関連を検討したい。この関連を要約して示したのが、図7である。まず、「チームで働く力」(チームワーク)の能力要素である「発信力」(自分の意見をわかりやすく伝える力)と「社会人基盤力」とは次のような関連がみられた。「発信力」とは「マナーを守る」と有意水準5%で関連がみられたが、関連がみられたのは1項目のみに留まった。ついで、チームワークの能力要素である「傾聴力」(相手の意見を丁寧に聞く力)は、「基礎的読み書き」とは有意水準1%で関連がみられた。また、「マナーを守る」とは有意水準1%で、さらには「公共心」とは有意水準1%で関連がみられた。この結果、「傾聴力」は、「社会的基盤力」とは、「基礎的読み書き」、「マナーを守る」、「公共心」の3項目とで関連がみられた。

チームワークの能力要素である「柔軟性」(意見の違いや立場の違いを理解する力)とは、「社会人基盤力」は次のような関連がみられた。この

「柔軟性」は、「基礎的読み書き」と有意水準1%で、「マナーを守る」とは有意水準1%で、さらには、「身の周りの自立」とは有意水準5%で関連がみられた。「柔軟性」と「社会人基盤力」とは3項目で、有意な関連がみられたことは注目される。またチームワークの能力要素である「状況把握力」（自分と周囲の人々や物事との関連性を理解する力）と「社会人基盤力」とは次のような関連がみられた。「状況把握力」は、「基礎的読み書き」とは有意水準1%で、「マナーを守る」とは有意水準5%で、さらには「身の周りの自立」とは有意水準1%での関連がみられた。

また、チームワークの能力要素である「規律性」（社会のルールや人との約束を守る力）と「社会的基盤力」とはつぎのような関連がみられた。「規律性」は、「公共心」とは有意水準1%で、また「身の周りの自立」とは、有意水準1%での関連がみられた。ついでチームワークの能力要素である「ストレスコントロール力」（ストレスの発生源に対応する力）は、「社会人基盤力」とは次のような関連がみられた。「ストレスコントロール力」は、「基礎的読み書き力」のみで有意水準5%での関連がみられた。

以上で検討してきた「チームで働く力」と「社会人基盤力」との関連をまとめると、次の5点が指摘できる。以下のようなものである。(1)「マナーを守る」という「人間性、基本的な生活習慣」の力は、チームワークの6能力要素の中で4能力要素と関連があることがわかった。(2)同様に、「公共心」という「人間性、基本的な生活習慣」は、チームワークの6能力要素の中で3能力要素と関連があることがわかった。(3)「身の周りの自立」という「人間性、基本的な生活習慣」（思いやり、公共心、倫理観、基礎的なマナー、身の周りのことを自分でしっかりやる等）は、チームワークの6能力要素の中で3能力要素と関連があることがわかった。(4)「基礎的読み書き」という「基礎学力」（読み書き、計算、基本ITスキル等）は、チームワークの6能力要素の中で4能力要素と関連があることがわかった。(5)「チームで働く力」と「社会人基盤力」との関連でいえば、「人間性、基本的な生活習慣」との関連が強く、「基礎学力」との関連ではわずかに

「基礎的読み書き」が重要な関連がある項目であることがわかった。チームワークの力も、「社会人基盤力」と強い関連をもつことがわかった。

図7 「チームで働く力」と「社会人基盤力」

「チームで働く力」(チームワーク)

「発信力」：自分の意見をわかりやすく伝える力

	Pearson χ^2 値	自由度	期待度数	有意水準
マナーを守る	12.0	4	5 未満 0 セル	5% (<0.05)

「傾聴力」：相手の意見を丁寧に聴く力

	Pearson χ^2 値	自由度	期待度数	有意水準
基礎的読み書き	18.1	4	5 未満 0 セル	1% (<0.01)
マナーを守る	17.3	4	5 未満 0 セル	1% (<0.01)
公共心	23.5	4	5 未満 2 セル	1% (<0.01)

「柔軟性」：意見の違いや立場の違いを理解する力

	Pearson χ^2 値	自由度	期待度数	有意水準
基礎的読み書き	18.4	4	5 未満 0 セル	1% (<0.01)
マナーを守る	30.4	4	5 未満 0 セル	1% (<0.01)
公共心	22.0	4	5 未満 2 セル	1% (<0.01)
身の周りの自立	9.6	4	5 未満 0 セル	5% (<0.05)

「状況把握力」：自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力

	Pearson χ^2 値	自由度	期待度数	有意水準
基礎的読み書き	18.3	2	5 未満 0 セル	1% (<0.01)
公共心	7.6	2	5 未満 0 セル	5% (<0.05)
身の周りの自立	12.4	2	5 未満 0 セル	1% (<0.01)

「規律性」：社会のルールや人との約束を守る力

	Pearson χ^2 値	自由度	期待度数	有意水準
公共心	17.5	4	5 未満 1 セル	1% (<0.01)
身の周りの自立	26.9	4	5 未満 0 セル	1% (<0.01)

「ストレスコントロール力」：ストレスの発生源に対応する力

	Pearson χ^2 値	自由度	期待度数	有意水準
公共心	12.5	4	5 未満 0 セル	5% (<0.05)

5 「専門知識・インターンシップ」と「社会人基礎力・社会人基盤力」

社会人基礎力と社会人基盤（キバン）力との関連の検討の最後に、この2つの力と「専門知識」（仕事に必要な知識や技能等）と、大学生の「インターンシップ」（インターンシップに参加したい。あるいは参加した）との関連を検討してみたい。図8は、この「専門知識・インターンシップ」と「社会人基礎力・社会人基盤力」との関連を χ^2 検定で有意差をみたものである。まず、「専門知識」と「社会人基盤力」との関連では、「基礎学力」としての「ビジネスソフトには強い方だ」とは有意水準5%、また「スマホやSNSを使いこなせる」とは有意水準5%での関連がみられた。「人間性、基本的な生活習慣」としての「公共心」とは、有意水準1%での関連がみられた。さらに、「社会人基礎力」との関連では「前に踏み出す力」での「実行力」とは、有意水準1%での関連がみられた。

以上のことから、「専門知識」においても、「人間性、基本的な生活習慣」との関連が見られることがわかった。

「インターンシップ」は、「社会人基盤力」との関連をもつ項目は存在しなかった。ただ、「社会人基礎力」とは「前に踏み出す力」の「実行力」とは有意水準5%での関連がみられた。「チームで働く力」とは、3つの能力要素、「傾聴力」「柔軟性」「規律性」の項目で関連がみられた。「傾聴力」とは、有意水準5%で、「柔軟性」とは有意水準5%で、さらには「規律性」有意水準5%での関連がみられた。以上のことからインターンシップは、社会人基礎力の「チームで働く力」を学習・実習する良い機会になっているのではないかと考えられる。

図8 「専門知識・インターンシップ」と「社会人基盤力・社会人基礎力」

専門知識・インターンシップ

「専門知識」

	Pearson χ^2 値	自由度	期待度数	有意水準
ビジネスソフト	6.4	2	5 未満 0 セル	5% (<0.05)
SNS・スマホ	8.6	2	5 未満 0 セル	5% (<0.05)
公共心	10.0	2	5 未満 0 セル	1% (<0.01)
身の周りの自立	13.5	2	5 未満 0 セル	1% (<0.01)
実行力	10.4	2	5 未満 0 セル	1% (<0.01)

「インターンシップ」

	Pearson χ^2 値	自由度	期待度数	有意水準
実行力	12.3	4	5 未満 1 セル	5% (<0.05)
傾聴力	13.0	4	5 未満 0 セル	5% (<0.05)
柔軟性	12.8	4	5 未満 0 セル	5% (<0.05)
規律性	11.9	4	5 未満 0 セル	5% (<0.05)

6 まとめ

本稿の目的は、「社会人基礎力」の12の能力要素の育成においては、まず、特定の能力要素と関連する「社会人基盤（キバン）力」に注目して、それを職業人の基礎力と考えると、キャリア教育に取り組むべきではないかという視点の必要性を検討することにあつた。ここでいう「社会人基盤（キバン）力」とは、「社会人基礎力」フレームワークで提示されていた「基礎学力」と「人間性・基礎的な生活習慣」とを合わせたものに名前をつけたものである。「社会人基礎力」における12の能力要素は、この「社会人基盤（キバン）力」と何らかの関連あるいはかなりの関連を持つのではないかというのが、本稿の仮説であつた。

この仮説を検討するため、社会科学系大学の専門課程の講義を受講している学生を対象にするアンケート調査を実施した。アンケートは育成の手引き書などの経済産業省による事例を参考にして作成した。この論文の

データは、有効票186票のアンケートに基づいている。社会人基礎力の12の能力要素は、「基礎学力」と「人間性・基礎的な生活習慣」＝「社会人基盤（キバン）力」とは、次のような関連がみられた。

(1) 「前に踏み出す力」の「主体性」では、社会人基盤力の「マナーを守る」と関連がみられた。同様の「働きかけ力」では、社会人基盤力の「基礎的読み書き」、「マナーを守る」、「公共心」、「身の周りの自立」の4項目で関連がみられた。「働きかけ力」は、これらの「基礎的読み書き」・「マナー」・「公共心」・「身の周りの自立」の社会人基盤（キバン）力の項目と関連している可能性が高いことがわかった。同様に「前に踏み出す力」の「実行力」では社会人基盤力の「マナーを守る」、「公共心」、「身の周りの自立」の3項目で関連がみられた。「実行力」も、「マナー」・「公共心」・「身の周りの自立」の3項目で、社会人基盤（キバン）力の項目との関連がみられた。

「考え抜く力」の「課題発見力」では「SNS・スマホ」と「マナーを守る」の項目で関連がみられた。現代の大学生にとっては、スマホやSNSの操作能力は「課題発見力」の一つとなっていると考えられる。同様の「計画力」では、「身の回りの自立」の項目との関連がみられた。この点も生活能力としての自立性の高さが「計画性」を支えているからであろう。

「創造力」は、社会人基盤力とは異なる項目と関連しているからなのか、両者の直接的な関連はみられなかった。「考え抜く力」は、「社会人基礎力」や「社会人基盤力」というよりも、大学での学びそれ自体と関連していると考えたほうがよいのではないか。¹³⁾

(2) 「チームで働く力」においても、以下のような、「社会人基盤（キバン）力」との関連がみられた。「傾聴力」・「柔軟性」・「状況把握力」の能力要素とは、より明確な社会人基盤（キバン）力との関連がみられた。「傾聴力」では、「読み書き」・「マナー」・「公共心」の3項目と関連がみられた。「柔軟性」では、「読み書き」・「マナー」・「身の回りの自立」の4項目と関連がみられた。また「状況把握力」でも「読み書き」・「マナー」・「身の回りの自立」の3項目と関連がみられたことは注目され

てよい。

(3)最後に、「専門知識・インターンシップ」と「社会人基礎力・社会人基盤力」との関連では、仕事に必要な知識や技能である「専門知識」は、「ビジネスソフト」・「SNS・スマホ」・「公共心」・「身の回りの自立」と関連がみられた。能力要素とは「実行力」との関連がみられた。「インターンシップ」は、「社会人基盤力」よりも、「社会人基礎力」の能力要素との関連がみられた。とりわけ「社会人基礎力」の「チームで働く力」との関連が注目された。

以上が本稿で明らかになった結果である。これらの結果は独立性が検討されたにすぎない。が、以上の検討から、理論への若干のインプリケーションに言及すると、次のような今後の課題が考えられる。それは、社会人基礎力における、「前に踏み出す力」や「チームで働く力」等は、この論文で言う「社会人基盤（キバン）力」との関連が深い点である。「社会的基盤力」は、「基礎学力」と「人間性、基本的な生活習慣」から構成されていた。この、「基礎学力」、「基本的な生活習慣」、「社会性（人間性）」などの基盤力が、大学から仕事への移行の検討により有効な尺度として検討されていき、能力要素との関連を検討できれば、より有用な知見をうることができるのではないかと考えられる。実際の就活や人材選抜において重視されているのは、大学ならば大学生水準での「基礎学力」、「基本的な生活習慣」、「社会性（人間性）」などの基盤力（キバン）が求められ、その多様性と個性が注目されているのではないか。「専門知識」の学力や「インターンシップ」の深化についても同様の工夫が求められているように思われる。社会人基盤（キバン）力は、これまでの日本における就職選抜の過程で、多くの企業が重視してきた能力と重なる点が多い。今後は、この基盤力に加えて、社会科学系においても専門知識が要求されていく時代となろう。このため社会人（職業人）基礎力は、この社会人基盤力と「専門知識」とが組み合わせられたものになると考えることができよう。

- 1) 経済産業省、「社会人基礎力に関する研究会 「中間取りまとめ」」2006。
www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/chukanhon.pdf 20180608。
- 2) Eric Erikson, Childhood and Society, 1950, W.W.Norton&Co. 小此木啓吾訳、「人生の8つの年代」、小此木啓吾、『現代精神分析2』、誠心書房。
- 3) 経済産業省、『社会人基礎力 育成の手引き —日本の未来を託す若者をそだてるために—』、2010、学校法人河合塾 p3。
- 4) 同、『社会人基礎力』。p 39の表がここでの表1であり、p 3の図が図1である。
- 5) この時期の高校生就職難については、安田雪、『働きたいのに…高校生就職難の社会構造』、2003、勁草書房。筒井美紀、『高卒労働市場の変貌と高校進路指導・就職斡旋における構造と認識の不一致』、2006、東洋館出版社等を参照。
- 6) 学士力の概念については次を参照。「学士課程教育の構築に向けて」中央教育審議会答申を参照。www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_.../1217067_001.pdf 20180624。
p12-13。「学士力」の概念についても、「社会人基礎力」の概念と同様の研究の累積がある。ここでは、詳しく触れないが、キャリア教育と学士力の関連を検討するものから、大学の学部の専門教育そのものを学士力として考察するものまで幅広い研究がある。ここでの関心は前者のキャリア教育と学士力の関連にある。寿山泰二、「大学におけるキャリア教育の課題：社会人基礎力の導入の観点から」、京都創成大学紀要 8(1)、27-45頁、2008。
- 7) CiNii Booksでは、「社会人基礎力」は34件ヒットしている。その多くは、実践の経過を記録した報告書か解説書である。2018.06.06。看護系やビジネス系の学問領域で実証研究が成果を上げていることがわかる。全国ビジネス系大学教育会議編著、『社会人基礎力の育成とビジネス系大学教育』、2010、学文社。福岡女学院大学浮田ゼミ編著、『日本一の女子大生が教える社会人基礎力』梓書院 2013。箕浦とき子、高橋恵編、『看護職としての社会人基礎力の育て方：専門性の発揮を支える3つの能力・12の能力要素』、2012、日本看護協会出版会などを参照。
- 8) 経済産業省、『社会人基礎力に関する研究会「中間取りまとめ」』、2006。同上。
- 9) 西道 実、「社会人基礎力の測定に関する尺度構成の試み」、プール学院大学紀要、2011、217-228頁。
- 10) 溝上慎一、松下佳代編、『高校・大学から仕事へのトランジション 変容する能力・アイデンティティ』、2014、ナカニシヤ出版。
- 11) 質問の文章は、経済産業省、「学生のレベル別行動事例」を参考にした。2018年6月時点では、経済産業省の社会人基礎力に関連するHPは、次のURLへ移動している。<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.html> 20180611。
- 12) 統計分析のソフトウェアとしては、IBMのSPSS v 25を利用した。
- 13) アクティブ・ラーニングや、PBL(Project-Based Learning)は、大学における「考え抜く力」の訓練の一つの方法である。後藤文彦監修、伊吹勇亮・木原麻子編著、『課題解決型授業への挑戦 プロジェクト・ベースト・ラーニングの実践と評価』、2017、ナカニシヤ出版。溝上慎一監修、溝上慎一・成田秀夫編、『アクティブ・ラーニングとしてのPBLと探求的な学習』、2017、東信堂など参照。

